

「あついさむい！」

いちばん印象に残っている言葉はなんだろう、と
考えて、ひとつ思い出した。数年前の或る日のこと
隣で眠っていた妻が突然、叫んだのだ。

「あついさむい！」

びっくりした。思わず、彼女を起こして尋ねる。

「今、『あついさむい』って叫んだけど、どういう
こと？」

「ん」

「『あついさむい』って云ったよ」

「あたしが？」

「うん、どういうこと」

「わかんない」

「あついの？ さむいの？ どっちなの？」

「ん、むにゃむ」

駄目だ。眠ってしまった。でも、私は「あついさ
むい！」が気になって仕方ない。長年生きてきて一
度もきいたことの無かった言葉。どんな詩や小説の
なかでも一度もみたことの無かった言葉。たぶん、
これから先も一度も出会うことはないだろう。そう
思うと、どうしても知りたい。人間は一体どんなと
きに「あついさむい！」って叫ぶのか。ちなみにそ
れは特別にあつくもさむくもない秋の夜の出来事
だった。

翌朝、もう一度尋ねてみた。

「昨日、『あついさむい！』って寝言云ってたけど」

「え、そう？」

「あつかったの？ さむかったの？」

「ちようどよかったんじゃない？」

うーん、ちがうと思うなあ。ちようどいいとき、
人間は「あついさむい！」とは叫ばないよ。でも、
仕方ない。本人が覚えてないんだから。それ以上ど
うしようもない。結局、「あついさむい！」は永遠
の謎になってしまった。その言葉は今も私の手の届
かないところで輝いている。

そして数日後、妻はまた寝言を云った。

「ねむい！」



1962年北海道生まれ。歌人。上智大学文学部英文学科卒。1990年に歌集『シンジケート』でデビュー。短歌だけでなく、評論、エッセイ、絵本翻訳など幅広く活躍中。若い世代を中心に、絶大な支持を受けている。2008年に「短歌の友人」で第19回伊藤整文学賞、「楽しい一日」で第44回短歌研究賞を受賞。著書に「ラインマーカーズ」「整形前夜」「現実入門」「本当はちがうんだ日記」など。近著に「絶叫委員会」「ぼくの宝物絵本」がある。